

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 74 号

平成 20 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」より

(1)

ウィリアム・バークレー (1907 - 1978)

イギリスの著名な新約学者。グラスゴー大学の神学部長を勤めた。60 冊以上の本を書き、特に『日々の聖書研究』(日本版「ウィリアム・バークレー聖書注解シリーズ全 17 巻」ヨルダン社)は、イギリスだけでも 100 万部以上、アメリカでも 50 万部以上出版された。内村鑑三のような人と言えるであろう。

グラスゴー大学の古典学科を卒業、ドイツのマールブルク大学で研究を続けた。1933 年から 1946 年まで、グラスゴー郊外のトリニティー教会牧師。1947 年からグラスゴー大学で新約聖書学、ギリシャ語講座、神学、聖書批評学の教授。

トリニティー・カレッジの学生聖歌隊の指揮者、スコットランド・ナショナル・オーケストラの熱心な支持者、フットボール・クラブの熱烈なファン、鉄道マニアでもある。

神の言葉を一般庶民にわかりやすく説明するすばらしい解説者。彼の書くものはすべて一般大衆に向けられている。彼の目的は、彼が他の学者よりはるかに良く知っている新約聖書を、普通一般の人にとって現実とかかわりのある、生きたものとするところである。偉大な人間は真に謙遜であり、謙遜な人間は真に偉大である。この言葉は、現代の奇跡ウィリアム・バークレーに、最もぴったり当てはまる。(デニス・ダンカン：本書の編者序文などより。)

1月3日 時間(1)

わたしたちが年をとり、余生が短くなったとき、つぎのことを忘れないようにしましょう。

ものごとを中途半端にしておかないこと 永久に未完了のままにならないように。

なすべきことを慎重に選ぶこと あらゆることをやる時間はないのだから。ほんとうに大切なことだけをやるべきである。

人とけんかや仲違いをしたまま一日を終らないこと 仲直りをせぬままこの世を去らねばならないかもしれないからである。

1月4日 時間(2)

時間についていつも念頭においておくべきことが三つある。

- 1 われわれに与えられている人生の時間は限られている。その終わりが来た時、それ以上の時間を手に入れることはできない。
- 2 人生の長さをだれも知ることができない。
- 3 学ぶべきことがあれば、いま学ばなければならない。先に伸ばせば伸ばすほど学ぶことがむずかしくなってくる。

「なすべきときはいまだ！」

1月5日 「もうお時間です」

演説者や説教者の話が長すぎるのは、たいていの場合、準備の不足のためである、とわたしは思う。演説にせよ、説教にせよ、短くしようとすれば、それだけ細心の準備が必要となることは、およそ弁論なるものの第1原則であるといってい。その場合、人は自分の言いたいことを正確に知り、またどのようないい方をすればいいかははっきり知っていなければならない。たいていの説教は、短く切りつめた方がかえって良くなるものである。イエスは2分のいや30秒の 比喻によって、饒舌な説教者が1時間しゃべってもなお足りない、深い教えを語る事ができたのだ。

1月7日 パレルゴン

パレルゴンを身につけなさい。

といってもおわかりにならないだろう。つまり、こういうことである。

かつてウェールズにいたとき、私は、応用化学の教授でコリント人への手紙の注解書を書いた人、また生化学の教授で日曜日ごとに、平信徒ながら立派な説教をしている人に出会ったことがある。(その他、教会のオルガニストの造船学の教授・産科学の教授、ゲーリック語の大家の数学の教授、鳥類の観察者のイタリア語教授、詩人の機械工学教授、俳優・監督の航空学教授、民話と考古学の大家の歯科学教授、スリラー小説を書く天文学者の例があげられている。)

要するに、このような人たちは、二つのことを同時にやってのけるからこそ、自分の専門分野においてかくもすぐれているのである。専門外の活動のおかげで、専門の仕事をするときに最高の調子を保てるのである。この専門外の活動　これをギリシア語でパレルゴン (parergon) という。

「弓はいつも引きしぼったままにしておいたら、やがて狙いが狂ってくる」。人はだれでも何らかのくつろぎを必要とするものだが、自己の本務に専念すればするほど、ますますそれが必要となるのである。

人生における第2の関心、パレルゴンを身につけなさい。これがあれば、本職の仕事がいつそううまくいくだろうし、レジャー(余暇)も問題視されることなく、かえって充実した人生の不可欠の部分となるだろう。

1月9日 精神集中

精神を集中するには二つのことが肝要である。

第1は興味ということ。興味のない事柄には、だれもほんとうには精神を集中することができない。興味があれば、精神集中は自然に行われることになる。

第2は、物事を長い目で見ること　そこから興味が出てくるからである。…

しかし精神を集中できるのは、仕事をすべきときにした場合にのみかぎられる。

一つ一つの仕事をやるべきときにやって始末をつけておくこと

これが精神集中への唯一の道である。というのは、あることをやるべきだったのにやらなかったという潜在意識が残っていると、それだけで精神集中が妨害されてしまうからである。

長い時間一つのことに集中できないのが子供の特徴であり、集中できるということは成熟したおとなのしるしなのである。

なにごとによらず集中することは必要である。が、なによりも大切なのは、魂の眼をイエス・キリストに集中することである。

イエスを見つめなさい。

1月11日 憩うまで... (2)

休息とは、かならずしも、何もしないという意味ではない。そういう場合もあるけれど。

活動を変えるのがいちばんいい休息になることがよくある。新約聖書の翻訳者であるジェームズ・モファットくらいたくさん仕事をした人は、めったにいない。彼をよく知っていた人の話によると、モファットの書斎にはテーブルが三つあって、当時進められていた聖書翻訳の原稿と、さらにもう一つ、進行中の探偵小説の原稿が、それぞれ別のテーブルの上におかれていたという。

モファットの休息の仕方は、一つのテーブルから他のテーブルへ移動することにあつたのである！

生気の無さが疲れとして感じられることがよくある。そのような疲れをなくすには、何もしないでいてはだめなので、むしろ何かほかのことをやった方がよい。

やることを二つもっていることは その一つは好きな趣味でもいい その人にとって大きな益となる。

これは人生の法則といってもいいくらいである。・・・

ほんとうの休息は神と結びつくところにある。われわれ自身を超えた力と結びつくことによって、われわれの力が新たにされるからである。

イエスは、くり返し、神と出会うためにさびしきところにおもむかねばならなかった。イエスでさえそうであった。ましてやわれわれにとってそれがどんなに必要なことか、いうまでもあるまい。

ほんとうの休息は神のうちに憩うことである。

1月14日 語れ！

間違った人生の道を歩いている人、なにもかも台なしにしてしまう人、明らかに自分の生を難破させ、他者の生を破壊し、あるいは他者を悲嘆に暮れさせようとしている人、そういう人を見て何もしていないのは怖るべき誤りである。

そのような時は話すことが義務である。

間に合ううちに話さなければならない。

話してももう遅いというときがやってくる。そのときにはすでに被害が生じてしまっているのである。...

適切な時に話さなければならない。

時機を失したことは益となるよりも害となる場合の方が多い。わたしたちは適切な時を選ぶだけの知恵をもっていなければならない。それに、相手に向かって直接に注意すべきであって、公衆の面前で難詰してはならない。そんなことをすれば相手の恨みを買うばかりである。

正しいやり方で話さなければならない。

真実を語らなければならないことはいうまでもないが、愛にあって真実を語ることも同様に大切である（エペソ4・15）たとえ真実を語っても、相手を傷つけるような、あるいは相手の悪いところばかりを指摘するような、あるいは高いところから決めつけるようない方をしたなら、せっかくの警告・譴責・忠告も全く無駄になってしまうだろう。

警告は優しくすればするほど、効力のあるものなのである。

わが弟の守り手たることはわたしたちに課せられた義務である（創世記4・9）。それはだれかが自分自身の人生を破滅させ、他者を傷つけようとしているときに、注意すれば出来るものをそれをせずにそのまま放置しておくようなことがあってはならない、という意味である。そのようなときには、沈黙ではなく語るこそが金なのである！

1月20日 読みなさい！

わたしにとってなによりも面白かったのは、ジョン・ウェスレーの、書物に対する考え方である。あるメソジストの歴史家によれば、ジョン・ウェスレーは371もの著述を出版したという。しかも、彼は毎年、だれよりも多く伝道旅行をし、だれよりも多く説教をした男なのである。…

彼は自分の助手や伝道者たちに本を読むように、それも、絶えず読むようにと、しきりにすすめ、「毎日午前中を、あるいは24時間のうち少なくとも5時間を、読書に費やなさい」と書いている。…

研究者また学者として知識を吸収することなしに、伝道者として知識を与えつづけることは、だれにとっても不可能であることを、ウェスレーはよく知っていたのである。

彼が読書を強要したのは助手や伝道者たちに対してばかりではない。すべての信徒たちに対しても強くすすめているのである。「メソジストの人々が本を読まなかったら、恩寵のみわざは一世代で消滅してしまうであろう」といい、また「本を読むクリスチャンは真理を知るクリスチャンである」ともいっている。…

絶えず、広く、本を読むということに、大きな価値があるのである。

1月21日 読みなさい！（２）

本を読む人は決して孤独に陥らない。

本のなかに出てくる人々が現実の人間のようになり、またそこに書かれた思想が自分の心を絶えまなく活動させてくれるからである。

本を読む人は決して退屈しない。…

本を読む人は決して無知にはならない。

彼は自分よりもはるかに偉大な精神を持った人たちと、絶えず交わっている。本をもたない伝道者は、大工道具をもたない大工のようなものだ。本を読むことをやめた伝道者は、やがて、伝道の名に値するような伝道をやれなくなってしまうだろう。過去および現代の偉大な人物たちが書き残してくれたものを、読まないでも別に痛痒を感じないという人は、よほど度胸のある人間である。

本を読む人は狭い世界に住むことがない。

本を読むということは、地平線を広げ、心の蔵を満たすことにほかならない。

クリスチャンは、あらゆる本の中で最も大切な本、すなわち聖書を読まなければならない。

聖書は一生涯研究しつづけても、その内容を汲みつくすことは出来ない。固い決意とたゆまぬ努力をもって研究すればするほど、聖書はいつそう多くの報いを与えてくれるのである。

1月22日 書きなさい！

わたしはかつてスコットランドの有名な伝道者ジョンストン・ジェフリー博士が、郵便切手の効用について語るのを聞いたことがある。彼のいうことは正しい。わたしたちはもっと手紙を書くべきだろう。

手紙は喜びの気持ちを伝えることができる。

わたしたちが何かに成功したとき、あるいは何か良いことが私たちに起ったとき、その喜びを分かち合ってくれ、心からおめでとうをいってくれる人がいるのは、じつに仕合わせなことである。

喜ぶものと共に喜ぶよりも、泣くものとともに泣くほうがずっとやさしい、といわれている。たしかにそうだろうと思う。…

手紙は感謝の気持ちを伝えることができる。

感謝と称賛のことばほどに人の心を高揚させてくれるものは、めったにない。そのようなことばは人を傲慢にさせたり、うぬぼれさせたりしはしない。そういうことばに値しないことを知っているがゆえに、かえって謙遜になるものである。

どんなに努力してもいっこうに成果が上がらなくて、失意落胆したという経験は、たいていの人々がもっている。そのようなときに、だれかが自分の仕事を評価してくれる心のこもったことばを、一枚の切手に託して送ってくれたとしたら、どんなに大きな励みになることだろう。

手紙は同情の気持ちを伝えることができる。…

悲しみの日、だれかがわたしたちのことを考え、わたしたちのことをおぼえて、人間として可能な限りわたしたちの悲しみをわかち合っていてくれることを知ったとき、わたしたちの心が大いに慰められるということである。だれかが悲しみに閉ざされているとき、まさにそのようなときにこそ切手を使うべきである 同情のことばを送るために。

1月23日 もう一度手紙のこと

わたしは今アメリカから一通の手紙を受け取ったところである。わたしの知らない婦人からのものだが、封筒の裏にこう書いてある。

手紙よ、野越え山越え海越えてゆけ、
おまえを運ぶすべての人を、神よ、祝し給え、
目的地なる家の人びと、
とりわけ宛名の人を祝し給え。

この手紙をきっかけに、わたしは手紙を書く場合の規則のようなものを記してみたくなった。

すぐに書きなさい、返事はすぐに出しなさい。

わたしは前に同情と感謝と喜びの言葉について語った。それらはすぐに書くべきものである。すぐに書かなければ、おそらく永久に書かないことになるだろう。

読めるように 特に自分の氏名と住所はわかりやすく 書きなさい。

読めないような字で書くのは失礼である。どこからまただれから来た手紙なのか分からなくては、返事の書きようがない。

新約聖書の中に手紙について書かれた箇所がある。クリスチャンはそれを決して忘れてはならない。すなわち、パウロはコリントの友人たちにこう書いているのである。「きみたちはキリストの手紙なのだ」(コリント第2, 3・3)つまり、イエス・キリストは、わたしたちを通して、世の人びとに語りたもうのである。

イエスは神の言(ことば)であり、私たちはイエスの手紙である。これはクリスチャンの特権であるとともにまた責任でもある。

1月27日 目的

だれかが「きみたちは将来何になりたいか」という問いを発したのに対して、いろんな答がかえってきた。そのとき、ものしずかな、内気で繊細な男がこういった。「みんなは笑うかもしれないけれど、ぼくは聖者になりたいんだ。」

聖者を定義すればつぎの三つになる。

- 1 聖者とは、その内にキリストが再び生きておられるそういう人間なのである。
- 2 聖者とは、人びとが神を信ずるのを容易ならしめる人間である。
- 3 聖者とは、自己を通して神の光を輝かしめる人間である。

聖者になるということは、まさにキリストとともに人生の道を歩むことにほかならない。そして、これこそ人生のほんとうの目的なのである。

人生は終ってみるまでは分からない。このことを忘れてはならない。...ある有名な人が、こういっていた。「最後の一周で落後する人間をいやになるほどわたしは見てきたからね。」

人生には息抜きできるときは一つもない。ジョン・バンヤンが幻のうちに見たように、天国の門からさえ地獄へ行く道が通じているのである。救われるのは最後まで耐え忍ぶもののみである。一日が完全に終るまで、誘惑に陥る可能性はなくなるしないし、また一生かかって積み上げてきたものを、一瞬の不用意や無分別に依って崩壊させてしまうこともありうるのである。

「つねに警戒を怠らぬことが自由の代価である。」

たえず警戒することは名誉の代価でもある。その警戒は最後までつづけられなければならない。